

【埋火】 うづみび

炉や火鉢の火が不要のとき、あるいは睡眠の間、火持ちをよくするため火種の炭を灰で覆っておくことを埋火といいます。酸素が十分回らなくなり火力が落ちて炭が長持ちするのです。わずかな火のため螢火ともいうそうです。生火[いけび]、生炭[いけずみ]という地方もあるそうです。

『熊野懐紙』に「旅宿埋火」という題があり、11枚22首が現存しています。(正治2年12月6日滝尻王子)

・埋火のあたりは冬の草枕もえいつる春の景色なるかな 藤原範光

[埋火の近くは冬でありながら戸外の春の景色のようだ]

このように、歌語としての埋火には、厳寒ながら春のような暖かさだという捉え方が多いようです。

茶家では不時の客にも対応できるよう、常に埋火をし、常釜をかけ助炭を被せるのが心得といわれます。

埋火をした灰を掘ると赤い顔をした炭が出てきます。茶家では除夜釜の残り火に炭を足し埋火にして年を越すそうです。流派によって異なるのかもしれませんが、この時足す炭は輪胴を使うのが通例のようです。この火が年明けの若水による大福茶の下火となるのです。大福茶とは元旦に家長が家族、内弟子に振る舞うお茶のことです。

ちなみに、炉はいつからあるのでしょうか。

利休の時代？ いやいや。絵画資料では、「掃墨物語」という室町時代初期の絵巻物に炉の絵があります。茶の湯との関係はその辺りから考えればよいでしょう。

しかし、炉の起源はそんなものではありません。仮に炉の定義を家屋内にある暖をとる設備とすると、日本を含め世界各地の石器時代の住居跡にそれらしきものがあります。縄文時代の竪穴史式住居にも明らかに炉(囲炉裏)の原型が確認できます。

今から50万年前に出現したホモ・エレクトスは言葉と火を最初に使い始めた猿人といわれます。その頃既に炉(囲炉裏)の起源らしきものがあっても不思議ではありません。火は外敵を退け、鈍足で闘う牙もない我々の祖先を守ってくれました。また暖をもたらし、寒い地域にまで行動を可能にしてくれました。その他、調理にも通信にも役立ちました。

炉は危険な火を安全に身近に置くことを可能にしてくれます。炉のおかげで人類は火を見て安らぎを覚える唯一の動物となったのです。

さすれば、炭手前は数十万年も続いた人類の営みを極めて洗練した所作にまとめたものといえましょう。

火は大自然の中ではあらゆる動物を恐れ慄かせますが、人間には最も穏やかな表情を見せてくれます。それが埋火なのです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~